



学園花の村機関紙第97号

2017年6月3日(土)

編集兼発行人 松井道夫

☎ (0537) 24-0101

FAX 24-0242

〒 436-0079

〒三十三番三 1065

食と健康、有機農業の3点セット

学園花の村代表

池守幸一

近くの小学校に畑のお手伝いに行くようになって2年目になりました。支援学級がじゃがいも、きゅうり、ミニトマト、落花生、枝豆、大根、人参、1年生がサツマイモ、2年生がナス、ピーマン、オクラ、きゅうり、3年生がワタ、4年生がヘチマと大忙しです。

田舎といえど生活スタイルはみんな都会風なので、子どもたちは当然農業に縁もゆかりもありません。その子どもたちに農業の楽しさを体験させてあげたい。その体験で子どもたちが野菜好きになればいい。幸い、野菜好きになってくれれば健康に暮らせる。そんな思いでオジサンが5人、オバサンが3人の総勢8人がお手伝いに通っています。

オジサンやオバサンたち、エンディングはもう直です。そのエンディングまでに少しでも次代を担う子どもたちの役に立つことをやっておきたいと、まあ、一生懸命です。

ところで、厚生労働省は1人1日当たり300グラムの野菜の摂取を推奨しています。でも2010年の数字は268グラムでした。

いま日本は超高齢社会にあつて、だれもが健康長寿を望んでいます。そして野菜を多く摂れば健康に良いと誰もが知っています。知ってはいるけど実際は少ない。わかっちゃいるけど食べられない。

ポイントはここ。このギャップを埋める。健康をめざすなら、もつともつと野菜を食べようということを実践の課題にしたいのです。健康と食をリンクさせる。大人は自分たちがもつと野菜を食べるだけでなく、子どもたちの食にこそ気を配らなくてはなりません。

そしてその野菜は自分の手で育てようという提案です。スーパーに並ぶ野菜は化学肥料と農薬だけでつくられている。確かに畑でつくられては

いるものの、工業製品みたいなものです。そんな工業製品ではない、無農薬、有機の、本ものの野菜を自分の手で育てよう。沢山穫れたら都会に住む息子や娘の家族にも送ろう、市民の多くが家庭農園にいそしむ「家庭農園 宣言のまち」をめざそうという提案です。

「手間ひまかけて、少なくとも」のが有機農業の本来です。家庭農園にこそ、似つかわしい。売らなくていい家庭菜園が、環境に頓着しない、安全に不安がある、おいしくない慣行農法をとる必要はありません。農産物の価格が安すぎるので、耕作が放棄された農地はゴマンとあります。都会だとちよつと大変だけど、田舎なら家庭菜園はいくらでもできます。無農薬有機の野菜は甘くおいしく、やわらかい。ホントに美味しい野菜に育ちます。その本ものの野菜を山ほど食べて健康な体を作ろう。健康と食と農業のあり方をセットにしてすすめようということです。

いま、掛川市では「健康日本一に向けて」として、検診率の向上や健康測定器具の設置などがされています。この提案がそれに加えられれば、きつと「日本一」に近づけると思っています。健康と食と有機農業を3点セットで進めようという事です。

華やかなハナズオウの花

小 関 栄

掛川の二十世紀の丘公園(通称たまりーな)に沢山のハナズオウ(花蘇枋)の木がある。

五月初め枝の節々に赤みがかった紫色の花が羽状に群がって咲く(右写真は下の枝先部分)。

桜の花が散って間もなく、赤紫のハナズオウの花が春たくさん爛漫に咲くのは、たまりーなの花の公園として実に相応しい。



このスホウ(蘇枋)の謂れはマレー語のSAPANGの音写らしいが、また、色が蘇枋色(黒味を帯びた赤紫色)に近いことが語源とも云われている。なお、蘇枋と云う言葉は漢語であるが、この木の原産はインドでマメ科である。

この植物は赤い色素ブラジリンを多く含むので、この花木を煎じた汁に種々の触媒を加えて赤色、紫色、この中間の赤紫色に染色できるとして古くから染料とし重宝がられている。秋には結実して鞘の中に3,4個の可愛いマメが出来る。(左は公園のハナズオウの花木、5/1撮影)

ハナズオウ 紅むらさきの カンザシか 淡水

鈴木淳子さん 米寿おめでとうございます

光陽の里 楽農会会員の鈴木淳子さんは昭和4年7月生まれ、

めでたく米寿をお迎えです。お元気で光陽の里で畑仕事にいそし

む淳子さんの近況をお伺いしました。(写真は鋤を振る淳子さん)

6時半起床で始まる淳子さんの日課は、水曜日の病院通いを除いて午前中は地域の友達とグランドゴルフ。結婚前からの仲間と畑のことなど楽しい語らい。昼食を済ませて光陽の里に出かける。住まいの葛川から三輪車をこぐ。行きは上り坂で25分、帰りは20分だ。家族から注意しきりだが、今のところ少しも苦にならない。子供、孫、それに友達みんなが応援してくれている。ジャガイモ、玉ねぎ、エンドウ、ナス、キュウリ、カボチャなど、教えてもらいながら種から育てる野菜作りに取り組んでいる。食べてもらえてうれしい。健康にも注意している。毎週水曜日病院、脚と耳の治療だ。80歳で人口内耳の手術、高齢で勧められないという医師に畑をやって元気だからと無理に頼み込んで、5時間かかった手術に成功した。十年一日のごとし。変わらぬリズムで畑を楽しむ淳子さんの人生に拍手を送ります。(伊藤公博記)



人生の楽しみ方

里山倶楽部 溝口博之

問題なのはやることなくしてV見学、ジム通い、医者通い、酒屋通いオツカサに頭下げ人生。逆に分不相応な高い目標に向かって神経、肉体をすり減らしている割に認められなくて悩む人生も問題だろうな。

里山倶楽部で少年時代持っていた夢、ツリーハウス(正確にはツリーテラス)をリタイア年代が作った。意味があるかないかよりとりあえず、皆でやることの楽しさを味わった。出来た後はオープンカフェにしようか、キャンプハウスにしようか、ピザ窯を作ろうか、

皆で考える楽しみもできた。金もつけ事業ではないし、カネなし、皆の奉仕事業で何とかしたのだから値打ちがある。

知人に七十代のマラソンマンがいる。三カ月かけてスペインに行つて走りながら現地人と交流するんだって。こんなことしたって何になる?認められなくてやるわけじゃあない、なんしょかんしょやりたいと思つたらやる、これが人生のだいご味だろうな。

野菜は見た目?

楽農会 友安國雄

寒さの中から糖度を増した冬野菜から緑あざやかな春野菜のおいしい季節になってきました。安全でおいしい野菜を食したいとの思いで農薬、化学肥料、また厩肥は多量の動物医薬(ホルモン剤等)が含まれている懸念から使用せず、米ぬかや畑に生える雑草主体のボカシ肥料で微生物を育て、そこで生まれたものはそこにかえず、そんな思いで農作業を楽しんでいます。この時期、私の畑では昨年よりてんと虫の幼虫が多く目につきます。少しずつ彼らにとって住みやすい環境になつているのかな

花鉢10鉢を「きほくのもの」
ペンタスに寄贈

倉馬の里 藤本 将

「きほくのもり」ペンタスは平成28年に倉真報徳社の社屋内に新設された障がい者支援施設で現在10名の方が活動している。これまでも「倉馬の里」のわらび園を利用してもらっておりました。

花鉢は「学園花の村」の創設者宮城正雄さんから以前に提供されたもので、これまでうまく活用されていませんでした。「きほくのもり」での仕事に花の苗作りも予定していることも知り、花鉢の提供を申し出たものです。

(「きほくのもり」理事長 戸塚久美子さん、施設長 空岡英司さん、ペンタスは星型の花ビラが重なり合つて咲く花の名前で花言葉は希望が叶うです。)

布マルチ稲作を広めよう

倉馬の里 藤本 将

「学園花の村」では今年度、水管理が整備された掛川市初馬地区の農家を主体に布マルチ稲作の導入を働きかけてきた。29年度は「食の安全」を求める女性陣を主体としたミニ勉強会を立ち上げ、粘り強く働きかけたいと考えている。



(テラス作りに励む会員の皆さん)

相羽さんの百歳

神様のくれた贈り物

健康・長寿

私は静岡県の一しずおか健康長寿財団」の生きがい特派員をしています。健康長寿促進活動の一環として、元気なシニア世代を取材して、財団のホームページや年4回発行の情報誌「すこやか長寿」に記事を書いて発信しています。今回柴さんから100歳でも元気に農業に従事している相羽さんを紹介してもらい、お会いすることができました。

財団からの注意として「いくらお元気でも100歳の方に会うときは30分以上の取材はご本人の体の負担になるので避けるように」と指導されていました。

でも相羽さんは本当にお元気で100歳と聞いていなければ、70歳、80歳の方のように会話が面白く、あつという間に2時間近くになつてしまいました。自らの案内で今まで作つてこられた蓑や木工作品も見せてもらいました。

蓑は子どものころ見た記憶はあるのですが、蓑の裏側まで手に取つてみたことはなく、美しい模様編みになっていることを初めて知りました。作業着と思つていたのでとても手が込んでいることに驚

きです。

今回初めて身に着けてみる事ができました。背負い方なかなかむずかしいです。相羽さんから教えてもらいやつと背中になまこつてくれました。けっこう重たい！情けないですが、ちよつとよろけてしまいました。昔の人はこんなに重いものをつけて歩き、仕事をしたのだから鍛えられるはずですね！

若い時の軍隊経験、戦後農業しながら建築の仕事にかかわつたお話、器用な相羽さんは目の前にあることに真面目に取り組んでこられました。「遊びが苦手ですね」「デートボールもやれば、上手にできると思うけんがやりたいと思わない」と笑う相羽さんは農業やものづくりが大好きなようです。「父親が早く死んで19歳から一家の長としてつらい時もあった」そうです。そんなまじめな相羽さんに神様は健康と長寿をプレゼントしてくださいだったのでないでしょうか。相羽さんには100歳だからという節目は不要で、今まで通りいろんなことに取り組んでほしいと思いました。

最後に今回の取材に対して、事務局の藤本さんと柴さんにお世話になったこと、心から感謝申し上げます。

(荒木弘子)

80歳からの生き方を

求めて掛川へ

5年前に夫を送り、妻や母の座を終え、京都で勉強のために3年を過ごし、80歳になった時、これからの生き方を考えた。娘たちに世話にならず、できる限り自立して過ごしたいと思い、健康で、国民年金に近い生活費で過ごすにはと考え、掛川で新鮮で安全な野菜作りをしたいと有り金をはたいて庭付の中古の家を購入した。

江戸期の女性史料や蔵書を収蔵する書庫も作り、離れ屋を改装して地域の茶の間とし、生垣や庭を手入れして3カ月が過ぎた。庭には季節の木々や草花が次々と芽を吹き花を咲かせ、真っ青な広々とした青空や星いっぱい夜の夜空に感嘆の声を上げています。

地域に入るのに何の抵抗もなかったが、それ以上に地域の方々が喜んで迎え入れてくださり、町会や高齢者の各サークルにも加入し友人もたくさんでき、竹の子や蕨や季節の野菜を届けてくださり、感激している。

思えば20年前に、光陽の里の300坪の畑を東京から新幹線で月に1〜2回通って草刈り中心の耕作に

励み、「ほー、新幹線に乗って大根作りに行くとかね」と九州の従兄に笑われながらも、わずかの収穫物を東京へ運ぶ喜びを味わった。

10年が過ぎたころ、「学園花の村」の創始者宮城正雄さんの運転する軽トラに乗って、住むところを探して走り回り、倉真の松浦家の小山を借りて宮城さんと友人の井上さんの大変なご奉仕で整地し、小屋を建て「倉馬の里」と称し、東京から通いながら少しばかりの野菜と草花を育て10年を過ぎました。

そうして今、「倉馬の里」から10キロ離れたここ本郷で、新たなミニ農業の生活を始めた。「学園花の村」の創立以来、20年が経つた今、多くの仲間も高齢化してきた。若い方の入会の乏しいことを考えると、会の運営も困難になりつつある。高齢者の楽しめる農や自然との接し方を考えなければならぬだろう。

午前中は野菜や花作り、植木の手入れ、午後は離れ屋で皆さんと様々な勉強や工芸品作り、和裁、料理などを楽しみ、晴耕雨読、半日農業の生活をしたいと思つている。

(柴桂子)